

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

— 子ども・仔馬を抱く石像を考える —

春日井 眞 英

はじめに

これまで東海地方のクリシタンに関わる石仏・石像を追ってきた。石像の中には子を抱く観音や、地藏がある。この種の石像は通常、子が授かることを願い、その子の無事な成長を祈るという民俗的な習俗と仏教が融合したものと説明されている。ここには日本人の家族観、自然観に繋がる日本文化の基層的要素がある。このように見ると、子どもを抱く石像に仏教的な根拠を求めることは厳しくなる。また、石像には説明しがたい意匠が多い。特に子供に関係するものを見ていけば、地藏・観音が子を抱く理由であり、子の位置である。つまり、石像が抱く子が刻まれるのが、なぜ「右」、「左」なのかという問題である。加えて、その子が「赤子」か「幼児」かという違いもある。この問題は些細なことなのかも知れないが、信仰、教義という面から見ると無視できない、それは石工の「差配」「裁量」という言葉では済まない問題である。他にも、馬頭観音の頭上の馬の数、観音の背後に刻まれる領巾が、飛天のまとう天衣ではなく、腰の辺りに蝶や蜂の羽のように刻まれているものがある。このことについては、石工に仏師達のような儀軌の知識がなかったからという声もある。しかし儀軌からは、石像が子を抱く理由、その位置、赤子あるいは幼児の違いは

説明ができない。少なくとも、釈迦誕生に関しても七本の牙を持つ白象が摩耶婦人の体内に入った夢、アシタ仙人の預言の話しか伝わっていない。誕生後の釈迦、あるいは幼児期の釈迦を抱き上げるという伝説は見当たらなかった。もし、各地に残る子を抱く石像を宗教的造形物と考えるならば、そこには何らかの物語が伝わり、観音もしくは地藏という仏教的要素が関わると考えたい。つまり、これら石像は単に、仏教的な様式を借りただけのことであり、石工が仏教的領域に入り込んだからと考えられる。仏師の世界では仏像は儀軌に従って意匠が定まり、儀軌の造詣が求められることになる。同様に、クリシタンの領域でも石像造立に携わる者には仏教とは異なる宗教的様式に沿うことになる。つまり、キリスト教的な石造に携わる石工らは仏教の知識を有しながらもキリスト教的な様式に従っていたことになる。このような石工が子供を抱く地藏、観音を彫るならば、彼らは子供の位置、さらには「赤子」「幼児」の違いを十分に理解していたことになる。つまり、仏師の世界では釈迦誕生に関わる記述に赤子を抱く表現は無く、また赤子、幼児を抱くとする記述もないのである。そのことは観音、地藏の抱く子供は仏教的な内容と直接的には繋がらないことになる。つまり、クリシタンの石工達も様式を遵守した造立を行っていたことに注意すべきだと考えている。この段階で石工達が遵守したのは「聖書」の世界であり、聖書の言葉が石像に反映されていると考えられる。

路傍の石仏などに仏教的儀軌に反した要素が少ないのは、石工達が仏教的素養を背景にキリシタン的な造形をめざしたからであろう。

I 石像の抱く子供の位置

ここまで石仏(地藏・観音)と、その抱く子供について触れたが、注目するのが石仏の抱く子の位置(抱き手の右か、左か。その教義的背景)である。子供が右、あるいは左に彫られるかは石工の「裁量」との見方もあるが、裁量とするには根拠は弱い。それは仏教的前提からの消去法での結果でしかない。つまり子供が左、あるいは右に来る根拠は、仏典にはなかった。しかし、聖書の「ルカによる福音書」には子供の位置に関わる記述はある。それは、天使から救世主に会うまでは死ねないと告げられたシメオンが神殿でマリアとヨゼフに伴われたイエスを「救世主」と呼び、抱き上げる。それは「モーゼの立法」に従って、出産後四十日を経過のことである。シメオンはイエスを救世主と呼び、マリアから抱きあげ、神に感謝をするが、このときのイエスは赤子(生後四十日となる)であり、マリアの胸元で「左頭」で抱かれていたと考えている。それは母親が赤子を抱くときの姿を前提としている。つまり、母親が赤子を抱く場合、通常は頭が左になる。そしてシメオンが、左頭に抱かれた子を抱きあげると、その子はシメオンの腕の中では右頭となる。この流れでは、子供はシメオンとマリアの間で左右の位置関係となる。それはマリアをマリ

ア



図①・東栄町月・引田の子抱地蔵・左に頭。図②・下呂・温泉寺・子抱地藏・右に頭。



キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

観音、シメオンを子抱地藏と見立てることを可能とし、子供抱く地藏と観音という姿で聖書の世界が受容されたからと考えられる。つまり、キリスト教の日本の受容であり、子供を抱き上げるシメオンが地藏に変容し、マリアが観音として頭わされたことになる。また、地藏が赤子を「右頭」に抱く(つまり、シメオンがイエスを抱きあげる)ことは、シメオンがイエスを救世主と認めた姿でもある。シメオンは救世主の来臨を神に感謝し、マリアのもとに赤子を戻すと赤子は左頭になる。つまり、地藏(シメオン)または観音(マリア)が抱く子の位置関係には、ルカ伝に見る神殿での場面が展開することになる。それは、地藏・観音の二体があって、どちらかが子を抱いているならば神殿におけるシメオンとマリアと見ることができ、イエスを救世主と宣言する場面と見立てることができる。この場面は、同時にシメオンの預言、マリアの七つの悲しみという場面へと展開する。つまり、預言に悩み・苦悩する座像での思惟観音の出現ともなる。さらにイエスがシメオンからマリアに戻され、マリアが抱き留めるとき、つまり赤子を「右」に受け止めたときマリアは救世主の母、聖母となり、「左」では優しい聖母としての姿と考えている。なお、野村暢清は観音が抱く子供の「右」「左」の位置関係について、子を抱く聖母像を「マリアと観音」と区別して見ている。つまり、「生月(いきつき)島(長崎県平戸(ひらど)の西北方)のものを「マリイ像」とし、マリイ像は左手に子を抱き、右手に子を抱くのを「マリイ観音」と考えている。その理由として、生月島の方が中国から渡来したものが多かったことがその理由であろうが、そこには田北耕也師の



図③・左・子抱安観音・丁塚・海老・図④・右・細江・東林寺・子抱安観音

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

視点もある。また国内で製作されたものに右手で子を抱いていたものが多かったからであろうか。ここでは、「右」、「左」の問題は、マリア像（聖母像）と観音の区別に用いられている。このような分類は小型のマリア像では可能かも知れないが、「右」、「左」に子を抱くことの宗教的な意味が説明できない。くりかえすが、シメオンから戻されたイエスはマリアの右になる。このとき、マリアは救世主としてのイエスを授かったことになる。つまりシメオンが救世主と宣言したイエスをマリアに戻してからである。さらに、右に受けたイエスを左に抱き換えることでマリアは神の祝福を受けた聖母となると考えられるが、西洋の宗教画の研究が必要となる。だが、聖書に親しんでいる世界では聖母とイエスの位置関係は自明なことかもしれない。日本での初期のキリスト教教育は内容的にヨーロッパ本国の教育と同様に本格的なものであったと言う。つまり絵画についても教義の理解が必要であったことになる。そのことは石像でも同じであろう。そのため、キリスト教の教義に従った石像の造立は禁教令の下では日本的な変容は必然であったと考えている。その一例として新潟県東頸城郡松之山町の松陰寺に見る子を抱く地藏とマリア観音を考えてみたい。ここでは「木造の聖母子観音菩薩像と木造の聖母子地藏菩薩像（ママ）の二体」があり、神殿でのシメオンとマリアの話を彷彿とさせる二体であり、この像を預けた人物は聖書の絵解きをしながら巡っていたのであろう。禁教令が厳しくなれば子供を抱く観音像はマリア観音として詮索の対象となり得る。この問題を解決しようとしたのが赤子（イエス）の代わりに仔馬を抱く石像（図⑨・⑩）の出現と見る。これは馬小屋で生まれたイエスを仔馬に置き換えたわけだが、キリストン詮索を避ける工夫と考えられ、さらに地藏と観音が並び立つ二体仏（双体仏、僧形のものも含む）、三体仏もキリスト教の物語、教義を絵解き風に説くのに用いられていたと考えている。特に二体仏（双体仏Ⅱ含僧形）は地域によっては道祖神あるいは道陸人と呼ばれるが、中には小さな子

供を抱く像もある（図⑤・東栄町古戸、現在は所在不明）。このような子を抱く石像は東栄町にはこれしか見えていないが、この像をシメオンのいる神殿を訪れたヨゼフと赤子のイエスを抱くマリアと考えたい。ただ、道祖神の多くは杯事をする場面など男女の契りを暗示するものが下伊那から安曇野方面には多く、そこに刻まれる男性は烏帽子直垂、女性が十二単であることを考えると、古戸（東栄町）の石像は着衣の面からも異質となる。もちろん、東栄町にも烏帽子直垂・十二単という男女像の石像もあり、古戸の「子抱双体像」は異質となる。つまり、この像の寄進者は双体像の女性に子供を抱かせることで、道陸神とは違うことを示している。それは聖書を知っていることを示唆しているといえる。



図⑤・古戸・卵塔場
25×12cm（現在不明）



図⑥・古戸川合・「マ
リアのエリザベツ訪
問」か？46×28cm

東栄町にはキリストン的な石像は他にもある。それは古戸下川合の「サイノカミ」(図⑥)である。ここには振袖姿の女性二体が彫られている。一般的な「サイノカミ」あるいは「道祖神」は男女像、もしくは文字碑であり、振袖姿の女性二体は異質である。聖書には二人の女性が登場する場面がある。それは「マリアのエリザベツ訪問」と呼ばれる。二人は共に天使から受胎を告げられていて、マリ

アが告知を受けて後にエリザベツを訪ねるという話である。二人は親戚の關係にあり、マリアが訪れたときエリザベツの胎内にいる未来の洗礼者「ヨハネ」からも歓迎されたという。石像が、はたしてこのような内容を顯しているのかは判らない。しかし、女性二人という石像の説明は仏教的にも、民俗学的にも難しいが、聖書からは可能になる。他にも説明の難しいのが双体仏、もしくは三体仏であるが、それらも聖書からは説明が可能になる。ところで僧形の双体仏は二体とも剃髪が多いことから僧尼の違いは判らない。しかし、平安から江戸期にかけての尼僧、もしくは女性出家者が「尼そぎ」であれば、髪は肩辺りまであったことになる。古戸下川合のものを「尼そぎ」と見れば、世俗から身を退き、信仰に生きる女性の姿となる。



図⑦・長野市・昌禪寺の子抱地藏

キリスト教的な物語を表現していると見られる石像は長野市・昌禪寺にもある。この石像は境内の子抱地藏(図⑦)子供の頭は右)の傍らにあり、十字架の刻まれた冠(図⑧)を被り合掌する三体像である。近くには思惟観音像があり、これら石像から思惟するマリア(受胎告知に悩む、東方の三賢人、シメオン(もしくはヨゼフ)とイエスの降誕の前後を表現した石像群となり、キリシタンの聖書解説(絵解き)の素材と見ることができ。ただ昌禪寺の石造群の配置が昔のままなのかは不明である。



図⑧・長野・昌禪寺の三体仏(右端のものに十字架のついた冠)

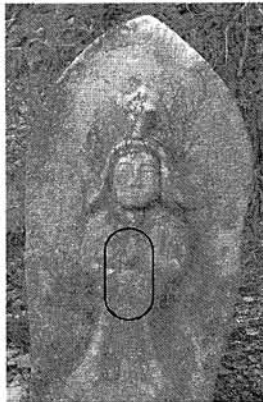
キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

II 石像に見る・仔馬・馬

ところで観音は六道に合わせて変化するという。西国三十三観音霊場に祀られているのは六観音であり、それらは「聖観音」、「十一面観音」、「千手観音」、「如意輪観音」、「馬頭観音」そして「准胝観音」である。馬頭観音は二十九番の京都府舞鶴の松尾寺、准胝観音は十一番の京都上醍醐の准胝堂の一カ所であり、他は千手観音が十五ヶ寺、十一面観音は七ヶ寺、如意輪観音が六ヶ寺、聖観音が四ヶ寺。そして、不空羂索観音が一カ寺である。ただ思惟観音はない。この観音にこだわるのは、路傍の石像に右手を頬にあて思惟する観音が多いからである。だが、頬に手を当てる仏像は弥勒菩薩、准胝観音、そして如意輪観音であり、「思惟観音」はでない。これら、准胝観音、如意輪観音も右手を頬にあて、如意輪観音は如意輪(法輪)を手にするが思惟観音は何も手にはしていない。大きな違いは思惟観音は双臂であるのに対し、如意輪観音、准胝観音は多臂である。この違いに注目すると思惟観音の出現は石工の技術に合わせて新しく、儀軌に沿わない異質な観音となる。また、思惟観音像をキリシタンの絵解き(石像による)の手がかりと見るならば、思惟観音像は受胎告知時のマリアとなり、他の観音、十一面観音などに紛れながら儀軌に反するように頬に左手、あるいは右手を頬に(図⑧)当て、仏教的儀軌のままに、また(図⑦)のようにX字型の十字架を脚絆に刻むという非仏教的世界を示していることに注目しておきたい。ここで馬頭観音に触れておきたい。この仏は頭上に馬頭を載き、畜生界で済度するとされ、馬の守護神として中馬に携わる人たちの信仰を受けている。この観音は唯一忿怒相、第三の目、三つの顔(三面)を持ち、二臂あるいは八臂である。その忿怒(怒り)の度合いが強いほど馬頭観音の救済力は強く、さらに馬の大食になぞらえ人々の悩苦しを食べ、諸悪を滅ぼすものとして崇

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

められている。ところで馬を、このような馬頭観音の他にも地藏や観音が仔馬を(図⑨、⑩、⑪)が抱いていることに注意したい。それらは馬頭観音とは異なり、観音、地藏が仔馬を抱くことから馬小屋で生まれたイエスの象徴と考えている。その背景には悪を滅ぼすとされる馬頭観音の受容が、一役買ったと考えられる。つまり、諸悪を滅ぼし、煩惱を断つ馬頭観音の仏教的な馬の守護者という姿がキリストンの世界に借用され、憤怒相で諸悪を滅ぼし、畜生界での救済で中馬に携わる人々に親しまれたことから、馬頭を戴く優しい観音、地藏の姿を借りたと考えている。ここで問題とするのは仔馬であるが、その数が馬頭観音ほど多くないことは中馬街道を調べてみると判る。小さな馬頭観音は風化していても脇街道では多い。それに対し、大型の馬頭観音は足助、稲武など大きな宿場周辺にしかない。ただ、中馬街道の周辺では憤怒相の石像よりも、子抱観音や地藏のほうが多い、また仔馬を抱く(図⑩、図⑪)地藏と観音は大鹿村や駒ヶ根辺りでは墓地周辺などに隠されるように祀られている。



図⑨・大鹿村・馬頭観音・子馬を抱く(左)
図⑩・野尻・妙覚寺・地藏の手の下・腹部(中)
図⑪・駒ヶ根・禅福寺付近共同墓地・馬頭を持つ(右)

る。これら仔馬を抱いた石像は、イエス誕生の話を前提とすれば、仔馬はイエスの象徴となり、地藏、観音像が仔馬を抱いても本質は変わらない。また、豊川・金像寺の馬頭観音(図⑫)の目に十字架があることは馬頭観音とキリスト教との強い繋がりを示していると考えている。

ところで地藏・観音が抱くのは赤子、あるいは幼児であるが、この違いは何を意味するのであろうか。聖書(ルカ伝)の世界の時間軸から赤子・幼児の違いが読み取れる。その時間軸の違いからイエスの置かれている世界の時間経過が読み解ける。つまり、マリアたちが神殿に詣でた時は赤子、エジプト逃避の期間が赤子から幼児期となる。さらに馬頭観音の憤怒相の諸悪を滅ぼすという戦闘的な表情が、馬頭を頭上にいただく柔和な女性的な姿へ変容する背景には教団の布教・指導方針の変化と見ることが出来る。この柔和な馬頭観音の姿は単体、双体、そして三体の意匠で造られる、他にも単体の観音の頭に馬頭を一頭、二頭、三頭といただくものがある。

- (イ) 単体で頭上に一頭の馬頭があるもの(図⑬)。
- (ロ) 一石二体の観音像が、それぞれ馬頭をいただくもの(図⑭)。
- (ハ) 単体で頭上に二頭の馬頭が刻まれているもの。
- (ホ) 一石二体の観音像が二体、それぞれ馬頭をいただくもの。
- (ヘ) 単体で頭上に三頭の馬頭をいただくもの(図⑮)。
- (ト) 単体の観音像が三体、それぞれ馬頭をいただくもの。
- (チ) 「馬頭観音」という文字に馬頭が刻まれている。
- (リ) 「馬頭観音」の文字だけのもの。

この種の馬頭観音は各地に見ることが出来るが、三体の姿で彫られ



図⑫・眼に十字架・金像寺・馬頭観音・豊川

るもの、もしくは頭上に三体の馬頭（文字式のものも含め）を有するものは伊奈方面に多い。これら観音の多くは西国三十三観音の巡拝地や共同墓地周辺に見るが、基本は単体で、頭上の馬頭は一体である。中には単体で頭上に二体、あるいは三体の馬頭をいたくものもある。同じ頭上に馬頭を載く観音にしても、その馬の数の違いが何を示すのであろうか。これら巡拝地には子供を抱く地藏・観音像もある。三十三観音の巡拝地は地域によっては一カ所に集約されているところもあるが、文字通り三十三カ所を巡るところもある。三十三の観音巡拝地を廻るのは大変だったであろう。しかも点在する観音霊場を詣るのは主に女性だったという。なぜ女性達、と言う疑問がでるが、この観音巡拝をする女性達の役割が山間部で迷った人を助けるコンフラリア（クリシタン集団による共助活動）でなかったかと考えている。そうすれば、巡拝地周辺にある石像群の絵解きを説明する手がかりにもなる。これらの石仏群は乱雑に散らかった石仏群に見えるが、それはクリシタン詮索を避ける工夫であり、巡拝する指導者の記憶の中では整理されクリストの物語の配置となり石像による絵解きが語られたと考えている。つまり、子抱地藏・観音（シメオンによる救世主宣言、救世主の母としてのマリアの確認）、双体馬頭観音（マリアとヨゼフ）など巡拝所

クリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える



図13・単体の馬頭観音・駒ヶ根（左）



図14・双体の馬頭観音・王滝村（36×20cm）（中）



図15・三体の馬頭観音・茅野・御座石神社（右）

周辺に見られる石像を通して秘密の世界が語り継がれたと考えている。ただ、この話が伝えられたのは特定の人物にだけであり、それ以外の者には秘密であったと考えるのは、この巡拝中に人物評価がなされ、一部の人にしか教義、コンフラリアの活動の意味が伝えられなかったと考えている。

設楽町と東栄町の境にある花丸峠には「ダリ仏」（山中での行き倒れ）伝承がある。そこには行き倒れた人の墓石が数基ある。その中の興味深い一基が墓石兼道標である。その荒削りな長方形（64×24cm）の石の正面に

右月道 大坂住人
南無阿弥陀仏
左粟代道 金田新右エ門

と、ある。

道標の右側面に「元禄十三天（1700）七月吉日

左側に三州設楽地内

と、ある。

気になるのは「金田新右エ門」である。この人物が被葬者なのか、それとも寄進者か判然としないが、被葬者と見たい。だが「大坂住人」が被葬者のことを意味するのか、寄進者なのかも判らない。さらに左側面の「三州設楽地内」の理解の仕方である。これが墓石の設置場所のことか、それとも石碑の寄進者の所在を示すものか、である。仮に、石碑の立地場所を示すものであれば、石碑は他所から搬入されて来たことを意味する。また、「金田」姓は月、栗代、神田などにもあり、彼らとの関係も気になる。さらに石碑に記された元禄十三天の「天」である。地域の墓石を見る限り、墓石には「年」と刻まれているものが多い。ここに「年」の代りに「天」の文字を用いているのであれば、この墓石（道標）はクリシタンとの関わりが強いと考えられるのである。東栄町での墓石に「天」と刻むものは三輪河内の寛永十九（1642）（ま）天で確認している。この、「天」をクリシタンのものと仮定するならば三輪周辺には花丸峠のダリ仏よりも58年前にクリシタンがい

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

たことを意味する。また、花丸峠の墓石には「月」道、「粟代」道しか記されていない。つまり道標は神田（南から）方面から登った三叉路であり、ここに茶店があったことが知られている。つまり、設楽町、もしくはさらに南からの旅人のためとなる。そして「ダリ仏」（行き斃れた人）の伝承が残ることから、「月」「粟代」界限を利用する人物が多かったと理解できる。さらに「大坂住人」という記述はこの道の利用者が関西からの人物が多かったことを意味しよう。この道は「海老街道」と呼ばれ、花丸峠を南に愛知高原を下れば東海道の本宿、岡崎に至り。さらに南下すると三河湾になる。つまり、三河湾と信州のほぼ中間点となる。そして三河湾からは海路で大坂、さらに平戸（長崎）へ繋がり、宣教師達の居る長崎県平戸となり、平戸と内陸部の信州のキリシタンをつなぐ道を見ることが出来る。この内陸部の愛知高原の古道については、すでに別稿で触れた。ここでは豊田市波布の愛知高原から阿智村（飯田市近辺）までの一石三十三観音（年代的にはズレがある）が、ほぼ一日の行程距離（約四十キロ）の間隔であることから、それら一石三十三観音が道標として設置されていたのではなかったかと指摘した。また、この三十三観音像の中には翼を持つ像が彫られていることは重要である。これらの古道は別所街道に繋がる道であり、地域の道でもあった。だからこそ、その道での順調な往来のためには道標が必要だったと考えている。

III 石像に見る聖書の世界

ところで、古戸下川合にある「サイノカミ」には振袖の女性が二体刻まれている（図⑥）。この類いの石造は他所では見えない。聖書では「マリアとエリザベツ」（ルカ伝・註④参照）の話に行き着くが、これはキリシタンにとって重要なエピソードである。しかし、「キリシタンはいなかった」とされている地域にこのような石像が残ること

は集落全体が秘密保持に務めた社会的・歴史的背景を有していたと考えている。そのことを補強するように中設楽の墓石には火刑に処せられたと読める戒名があり、布川には「天」の文字が刻まれた石が納められているところもある。

ところで、イエス誕生の話を時系列にすると以下のようなになる。

- (1) 天使（ガブリエル）によるマリアへの受胎告知、イエスの誕生。
- (2) 東方の三賢人の馬小屋来訪。
- (3) 神殿でのシメオンとの出会いと預言（マリアの七の悲しみ）。

しかし、石像では西洋の宗教的絵画のような受胎告知は見えない。このことについては別稿で触れたい。筆者は思惟観音像を告知を受け、悩むマリアと考えている。また東方の三賢人は三体仏、もしくは馬頭観音の三体像に変容したと考えている。特に古戸の三体仏（図⑥）の顔面が十字架に見えるが、顔面に十字架が見える石仏は各地に多い。

さて馬頭観音は、「馬」を頭上にいただいている。だが、この馬を象徴と捉え、キリスト教に関係していると見れば三体の馬頭観音は「馬」という象徴的な姿から、東方の三賢人に見立て得る。その理由は、三賢人の姿を絵画的な形で表現することが難しかったことと、禁教令という制約があったからであり、十字架を顔面に刻むことで同様な制約を超えようとしたと考えている。そこには教義（聖書）の尊重があったことは若桑（注③参照）も指摘しているが、多くの制約の中でキリスト教の日本的「文化受容」（若桑・前掲書・30頁）が求められている。つまり、三体の馬頭観音の三賢人に見立てることは日本化の中で当然となる。また受胎告知では天使こそ彫られてはいないが、告知を受けたマ



図⑥・東栄町・古戸・普光寺内（十字架の顔）・天保・（35×43cm）

リアは驚き、話を理解するために思惟する形になったと考えている。ただ、その思惟する姿は仏教的姿とは異なり、「右手」ではなく逆の「左手」を頬にあてる観音像（思惟観音）になったと考えている。つまり、表現しがたい天使の姿を省き、告知を受け悩むマリアが日本的な「受胎告知」の姿になったと考えている。特に、儀軌とは異なる左手を頬にあてる像は下伊那地方に多い。この右手を頬にあてるのに対し、「左」手を頬にあてる意匠は儀軌とは異なる非仏教的な姿となる。

また思惟像には出産に関わる苦悩も女性層には受容されたのである。それは受胎で生じるマリアの不貞の疑惑である。ヨゼフが受胎したマリアを受け止めなければ、不貞を働いた女として世間の辱めを受け、マリアは殺されたかもしれない。だが、ヨゼフは天使に従いマリアを受け止めるが、それまでにはかなりの時間がたったようだ。ヨゼフに認められるまでのマリアの苦悩は女性達に共感されたであろう。だが、マリアが苦悩し、思惟したのは世俗的な問題だけでなく、イエスを待ち受ける世界についてでもあったことはシメオンの予言から判る。この、思惟する観音像の腹部の彫られ方に刻の経過が読み取れる。なお、図⑭の小布施の思惟観音の腹部に凹みがあるが、これを赤子と

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える



図⑭・高遠・片倉・脚絆に十字架（左）如意輪観音か
図⑮・小布施・六川・龍雲寺（h42×23cm）・腹部は抱帯か・手の位置に注意

「抱き帯」と考えている。その理由は可児・専養寺の鬼子母神像（図⑳）が「抱き帯」で子をだいていることによる。この寺に鬼子母神（鬼子母神もマリアの変形とされている）が祀られているのは、鬼子母神を奉じていた日見上人がこの地に天正十一年（1583）止錫したことによる。殊に天正十年は信長が本能寺で討死にした年であり、フロイス書簡ではパードレのセスペデスらが尾張の殿（織田信雄か）らに洗礼を授けたとあり、日見上人の行動は年代的に注目したい。なお、天正十四年に秀吉は禁教令を出している。図㉑の南木曾の思惟観音は、マリアの臨月期の姿であろうか、石工のリアリティーが伺える。くりかえすが、観音は衆生救済のために六道に添って変化するが、そのなかには思惟観音はない。思惟観音は、その右手を頬にあてる形態から准胝観音あるいは如意輪観音とされている。准胝観音は儀軌では二臂、四臂、六臂、十八臂、五十四臂、八十四臂であり、片膝を立てて坐す六臂像は、右上手を頬にあて、左手を地に付け、他の手には宝珠、数珠、宝輪、つばみの蓮華を持ち、立像はないとされている。また如意輪観音は、天界道に迷う人々を救う存在



図㉑・可児・専養寺
・鬼子母神・子供を抱く帯



図⑯・小布施・思惟観音・岩松寺（左）

図㉒・異形・思惟観音・南木曾（58×24cm）



キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

とされ、片膝を上げ、足裏の両方を合わせる輪王座と言う姿勢が特徴とされ、その膝に肘をかけ、指先を頬に当てるとされる。この准胝観音は、経典や儀軌には二臂、四臂、六臂、十八臂、五十四臂、八十四臂と説かれ、もとはヒンドゥー教の女神ドゥルガーであり、シヴァ神の妃とされ観音ではないとする見方もある。如意輪観音は右手を頬に当て、思索する姿を持つが、これらは多臂であり、意匠的に二臂の思惟観音とは異なる。

IV 子を抱く思惟観音

このような六観音に含まれない思惟観音像に子供を抱くものがある。子を抱く故に子安観音と目されるが、子安観音には思惟する意匠はなく、子供は幼児が多い。だが子抱思惟観音の子は判別しにくいほど小さく、一見するだけでは判らないこともある。その中でも(図19)の思惟観音には子供は刻まれていないが、その代わりに腹部の凹みに見えない子が象徴化されていると見ている。これは腹部の立体感を表現しながら子を隠す工夫だと見ている。さらに臨月をしめす意匠(図20)もある。これらの思惟観音像は右手を頬にあて、思惟観音の姿であるが腹部に凹みを持たせたり、左足の脛に赤子載せるなど子供を目立たない特徴的を示している。子安観音は基本的に幼児を抱くので、子が目立たない姿は石工の裁量かも知れない。だが、そこには宗教的理解、禁教対策の工夫があったことになる。また、これらの石像には瓔珞などの飾りがなく、菩薩とは異なることを示している。赤子は襦袢(こまき)にくるまれているが、幼児は宝冠(図23)をいただくことで高貴性を示している。さらに、これら赤子を抱く観音像の胸もとの帯状の模様は袈裟とも見れるが、筆者はそれを赤子の「抱き帯」(図21)鬼子母神参照)と考えている。このような赤子を抱く思惟観音像も子安観音に分類されているかも知れない。しかし、石像の右手の意匠を重視

すると、子を抱いてはいても思惟観音と分類したい。ただこの種の石像では「子」の存在には気が付き難い。それは、あまりにも小さく彫られ、目立たせまいとする意図があったと言える。現在この意匠の石像は、駒ヶ根と豊川近辺でしか確認できていない。そこにはキリシタン探索の影響があったと考えている。その背景は信長の時代から岐阜、犬山、清洲界限へ来ていた宣教師達が下伊那方面に訪れていたことを考えてみたい。宣教師達の行動には中部地区に確固としたキリスト教の足場を築こうという意図があったと考えるのは下伊那地方の石仏の特徴には十字架というキリシタンの象徴だけではなく、キリスト教の教義に関わる物語なども見られることによる。つまり、初期の段階では「十字架」に重きが置かれたが、次第にイエスの生誕、東方の三賢人の来訪といった物語へと質的な変化が計られたのであろう。特に小牧の真福寺には「十字架を担う」イエスがイメージされた地蔵がある。この地蔵が背負っているものは、一見して十字架とは判らない図柄である。地蔵は両手で縄を持ち、何かを背負う姿であり、十字架がデフォルメされていることから、ゴルゴダの丘へと歩を進めるイエスの姿と見ている。興味深いことは、その石像の右半分は滑らかに加工され、そこには何も刻まれていない。しかし左側には「元文三二(1788年)」とある。この種の十字架を背負う地蔵は小牧でし



図20・思惟観音(左)(66×25cm)・善福寺・円内に子供・
図23・善福寺・駒ヶ根(62×23cm)・膝上に赤子。図二三は円内の拡大部

か見ていない。注目すべきはこの寺には火刑となった道閑夫妻の墓がある。しかも墓石には「元文三年七月一日」と刻まれているが、これは道閑が処刑された寛永八年(1631)から107年の経過を示している。十字架を担う地蔵と道閑夫妻の墓石造立は付号しよう。つまり、道閑の遺徳が一宮界限のキリシタン達に百年以上に渡って継承されていたことを意味する。だが、このような石像の探索は今後は厳しくなる。それは、多くの寺院では墓地整理が進み、墓域の無縁仏などが撤去され石像・戒名などの資料収集が厳しくなるからである。この傾向は都市部近郷に限らない。過疎の地域では墓地自体が消失しつつあるからである。



図24・小牧・真福寺
・元文三年(1739)
64×18cm

V 「濃尾崩れ」の背景

「濃尾崩れ」、これは尾張・美濃の地方でのキリシタン弾圧の名称である。このキリシタン弾圧は美濃太田の近くにある塩、帷子。地域を所領していた旗本の林権左衛門が領内のキリシタンの捕縛を尾張藩に訴えたことが端緒とされている。この弾圧は寛文元(1660)年から七年(1667)の間続き300余人が処刑されている。この太田村(美濃太田)近辺を拝領していた旗本の林勝利(林権左衛門の先祖)は西濃(美濃の安八)の出身であり、小早川秀秋の臣下であったことで、その領地にはキリシタンが多かったと伝えられている。もともと小早川秀秋の臣下の大半がキリシタンとされ、当時の臣下仲間のキリシタンの影響を受けていたと言う。とくに家臣の中に高山右近と並ぶ熱心なキリシタン(ドン・ヨハネ天草伊豆守)がいたと伝えている。この林氏は関ヶ原の合戦で戦功を上げていたことで、小早川秀秋の死を契機

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

に家康に仕え可児・中島郡の二千石を拝領し(慶長七年)、慶長十三年(1608)大野郡清水(現・岐阜県揖斐郡内)で没しているが、領内でのキリシタンに対して寛容であったことが考えられる。そういう意味で林権左衛門の行動の背景が気になる所である。享保年間の「類門」御改帳(「春日井市史」内津見性寺蔵「春日井郡内津村類門御改帳」)では、塩村界限での地域的姻戚関係を見ることができ、しっかりとした信者組織の存在が伺える。つまり、寛文の「濃尾崩れ(1661~1667)」の15年以上前(寛永五年(1628))からの「一宮界限で道閑らの布教・洗礼活動も関係していたであろう。しかし、道閑ら一宮地域の中心的な活動家は寛永八年(1631)に捕縛され火刑に処せられている。西尾張部での宗教活動を考えると隣接する太田郡でのキリシタンの活動は当然なことだったかも知れない。そのことは「尾張にて切支丹出候覚」(一宮市立図書館)からも判る。そこには大田村の北隣、蜂屋村の瑞林寺住職・快叔是堅の正保年間のはじめに(1638)破仏などの非仏教的行動が記されている。この行動の裏には信州(下伊那)のキリシタンらが長崎の平戸と密接な関わりを保とうとした背景があったのではなかったかと別稿で触れたが、神父達の下伊那への派遣の要請もあったと考えられている。その信州側の人間が天竜川ではなく、矢作川、豊川に沿う古道を利用していたと考えている。そこには三河湾から海路による手段



(右)・図25・禅定螺し・に
印髪を結ぶ・物と・見月・をのい・栄・髪・東・螺



図25・恵那・岩村・水・羽
爪切り地蔵・容器を持つ人物
入れれる容器・正装した人物

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

があったと考えている。下伊那から南下すれば愛知高原に達し、山を下れば三河湾である。そこから知多半島、紀伊半島から瀬戸内を経由すれば長崎の平戸までの航路となり、陸路より時間が短縮できるといえる。逆に、京からは美濃、三河方面ならば、陸路では美濃の太田から中山道を進むのは支援者がいたからであろう。この地域へは岐阜の長良川の川湊・鏡島、木曽川の笠松からも近い。これらの川湊も伊勢、あるいは尾鷲から平戸（長崎）にまで繋がる。さて、美濃太田、笠松から東へ向かえば三河になり、北ならば中山道で大井（恵那）を経て伊那となる。この伊那はキリシタン大名の京極家が治めていた地であり、京極家の洗礼のために宣教師達も利用した道である。宣教師達が何回も犬山の五郎丸、一宮界限に来ていたことはバジェスの『日本切支丹宗門史』から知ることが出来る。神父らが、それらの地を訪れたのは布教活動だけではなく、神父らに代わる地域的指導者らの養成もあったことは道閑達の活動から考えられる。そのことは、都や、平戸にまで容易に足を運べない地域の指導者の養成が禁教令下においては教団拡充のためには必要不可欠であり、一部信者達の秘密と言える。だから、彼らの活動は表には出て来ないことになる。だが地域的指導の役割を担った者達が身命を賭して活動したことは信者達に評価されていたことは、石像として存在する彼らの姿が羽織袴での正装に水の容器を持つ人物（図25、26）として刻まれていることが語っていよう。このような恵那郡・岩村、また東栄町・月の石像が興味深いのは螺旋髪で刻まれていることである。その形姿から僧形に見え、地蔵にも見えるが、僧衣ではない。名古屋の平和公園の周泉寺の墓地には「水甕を持つ地蔵（図27）」は



図27・水甕を持つ地蔵
蔵・名古屋・周泉寺
・51×20cm

六地藏の一体に見えるが、これも六地藏ではなく、別物と考えている。これら水容器を持つ地蔵などの石像は少いが、「水」および「容器」ということに注目すれば手水鉢などの瓢箪型、扇形、舟形という形態に注意してみていくべきだと考えている。特に長崎県壱岐の手水鉢（図28）には注目している。それはハートの形と魚（イクトウス）の組み合わせになっている。これら石造は単なる石工の裁量などではなく宗教的な様式に基づいておたと考えている。

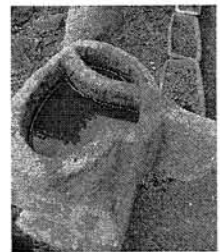


図28・長崎県壱岐・美濃谷の手水鉢

*****註*****

* ①若桑みどり『聖母像の到来』青土社 2008 142頁 これには1579年に来日した巡察師ヴァリニャーノの働きがあったとされている。

特に聖画像は、その基本の教義が前提になる。137頁

* ②福音書（ルカ伝）第二章25〜35に記された神殿で、シメオンが救世主イエスに会い、喜びイエスを抱き上げた場面である。

* ③『ブリタニカ国際大百科事典』TBSブリタニカ第三版2003野村暢清は他にも『日本大百科全書（ニッポニカ）』でも記している。これより前に、田北耕也氏の『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会1954年P.9がある。

* ④石造には△（三位一体）、＋×（十字架）などのキリスト教的な彫物があるのはキリスト教教育の日本的な変容かも知れない。

* ⑤高山滋『聖母マリ観音―御姿と伝承―』立教出版界 昭和四七年、『蘇るマリヤ観音』藤田公道 国書刊行会昭和五二年がある。新潟県東頸城郡松之山町の松陰寺にある。

* ⑥『東栄の石仏』東栄町文化財審議会（石仏編集委員会）昭和54年

*⑦「ルカ伝」(39〜45節) マリアのエリザベツ訪問。この場面でマリアを迎えたエリザベツの胎内の未来の(洗礼者)ヨハネが反応したという。

*⑧五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館平成5年(平成2年)207〜209頁

*⑨『東栄の石仏』東栄町文化財審議会石仏編集委員会昭和54年77頁

*⑩『かくれキリシタン……信仰の証……』浜崎献作 私家本1991、80〜86頁 特にキリシタン墓では「」点を天と読ませるという興味深い指摘もある。また、浜崎も指摘するが、他の墓石の年号では年と記されていても、意識的に「天」が用いられているという。

*⑪拙論「翼を持つ石造の分布……」石三十三観音の石造から……(石仏のイコノロジー)⑬『言語・文学・文化』東海学園大学 第20号(通巻79号) 2021

*⑫受胎告知にマリアが悩み、苦悩する背景には、現代では理解できない厳しい掟があった。それは、ヨゼフと婚姻はしていてもマリアは「男の人を知らない」と天使に伝えていたことから、結婚前の段階での受胎はマリアの貞淑さが疑われることになる。福音書(マタイ伝)では、ヨゼフはマリアと別れようとするが、天使に従いマリアを妻として受け入れる(マタイ・1:13〜23)。このマリアを妻とするのは天使に告げられてからであるが「福音書」によって記述内容は異なっている。気になるのは、天使ガブリエルがマリアに告知したのがルカ伝01:26〜56)では(イエスを妊つて)六ヶ月を経てからとある。身体の変化に気がついたマリアにすれば、誰の子か判らない子を妊つていることを理由に婚姻が解消されることは恐怖であろう。さらに申命記(22:23〜24)では、そのような身持ちのよろしくないものは城外で石で殺されると記されている。しかし、ヨゼフはマリアを受け入れ(マタイ・01:13)

キリスト教的視点から子どもを抱く石仏を考える

20) マリアの苦悩はなくなる。だが、日本の石工はマリアの苦悩が臨月近くまであったと表現している。イエスの誕生後もシメオンの予言によってマリアの母としての苦悩が増したのであろう。その苦悩の時間を凝縮させたのが図⑬〜図⑭と考えている。特に図⑬の腹部の凹みは禁教下での制約を避けた結果であろうか。

*⑬前掲書 『尾張と美濃のキリシタン』中日出版社 昭和五四年92〜95頁 津山知恵『日本切支丹迫害史』三一書房1995 90〜98頁

*⑭前掲書 『尾張と美濃のキリシタン』中日出版社 昭和五四年98〜101頁

*⑮前掲書 『尾張と美濃のキリシタン』103頁

*⑯拙論「翼を持つ石像の分布……」石三十三観音の石像から……(石仏のイコノロジー)⑬『言語・文学・文化』第二十号(通巻七十九号) 令和三年

プロフィール

東海学園大学名誉教授 専門は宗教学。著作に『水のコスモロジー』(近代文芸社、一九九五)。共著に「我らが内なるマイノリティー——忘れ去られていく内なる世界」『マイノリティーの孤立性と孤高性』(成文堂、二〇〇二)などがある。他にも奥三河の「花祭りの世界観」、集落の持つ「民俗方位」、そして「橋越という産育習俗」の調査研究がある。